

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02505

研究課題名(和文) 世紀転換期の「人種小説」と黒人文化形成 アフリカ系アメリカ文学再考

研究課題名(英文) Pre-Harlem Renaissance Writers and the Formation of African American Identity and Culture

研究代表者

奥田 暁代 (OKUDA, Akiyo)

慶應義塾大学・法学部(日吉)・教授

研究者番号：40296736

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアフリカ系アメリカ文学史の再考を試みるもので、とくにこれまで注目されずにきた19世紀末から20世紀初頭にかけて出版された作品群を詳しく見ていくことによって、あらたな潮流を見いだすことを目的とした。具体的には、この時代の黒人作家・編集者・出版者が、白人読者を意識しながら定評のある文芸雑誌へ原稿を寄せ、さらに黒人読者を意識しながら黒人誌に執筆をする、というように、二方向へ創作活動を展開していたことを解き明かし、さらにその活動の拠点となった文芸クラブや歴史協会、また新聞を介したネットワークについても明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究期間内には、国内の学会誌への論文掲載、共著の執筆、さらには国際学会での発表を行った。パプティスト派牧師サットン・E・グリッグスが執筆した複数の小説、朗読家ヘンリエッタ・デイヴィスが制作し演じた演劇、編集者ジェイムズ・E・マッガートが発行した文芸誌および発表した詩と音楽、活動家ジョン・E・ブルースが設立した歴史協会と連載したコラム、というように、それぞれの研究において一貫して世紀転換期の作家とその文化活動を広く明示した。不毛であったとされてきたこの時代のアフリカ系アメリカ文化を、演劇・音楽も含めた論考にまとめた。

研究成果の概要(英文)： The research focuses on pre-Harlem Renaissance African American writers like Pauline E. Hopkins, Sutton E. Griggs, James E. McGirt, Henrietta Davis and John E. Bruce. While the Harlem Renaissance is defined as a blossoming of African American cultural production starting in the 1920s, more scholars now find the preceding period as culturally significant as well. Building on such scholarship, this research revealed how at the turn of the century a substantial number of black periodicals, literary clubs and historical societies in cities became the sites for cultural activities. Scholarly lectures, poetry readings, dramatic and musical performances, often at a local church, formed the foundation and literary networks for many writers who also sought access to a larger white readership and to American literary identity.

研究分野：アフリカ系アメリカ文学

キーワード：ハーレム・ルネサンス前期 世紀転換期アメリカ文学

## 1. 研究開始当初の背景

2000年代から、歴史家が「どん底」と呼んだ1870年代から1900年代にかけてのアフリカ系アメリカ文学再考が進んだ。分離政策と投票権剥奪が徹底する時代に政治活動が活発になり、そのため文学活動は、第一次大戦後のハーレム・ルネッサンス期と比較して、不毛であったと説明されてきたが、この時代に多くの重要な文学作品が発表されたことが指摘されるなど、同時期を見直す研究が増えている。とくにBarbara McCaskillとCaroline Gebhardが編纂した*Post-Bellum, Pre-Harlem: African American Literature and Culture, 1877-1919* (2006年)は、この時代を「ハーレム・ルネッサンス前期」と定義しなおし、アフリカ系アメリカ文学発達史上きわめて重要と位置づけた。本研究では、以上の文学史修正を念頭に、とくに1895年から1910年までのあいだに集中的に小説を発表しながらも、研究されることの少なかったJohn E. Bruce、Charles W. Chesnutt、Sutton E. Griggs、Pauline E. Hopkinsなどを中心に分析することによって、この時代のアフリカ系アメリカ人作家の目指したことが解明できるのではと思うに至った。また、同時期の作品が白人迎合あるいは権利闘争といった二項対立で説明されることが多かったことに対して、地域、ジェンダー、宗教など、さまざまな要素を検討しながら、より多角的に読み直すことが必要と思われる。長らく政治的な小説と片づけられてきたグリッグスやホプキンスなどの作品を、むしろ彼らが黒人文化を構築・提供しようとした点から考察することを考えたのである。

## 2. 研究の目的

アフリカ系アメリカ文学批評は、1980年代以降、作品の普遍的な芸術性を主張しながら、黒人の伝統に基づいた特性に着目し、口頭伝承や音楽など黒人ヴァナキュラーを用いた分析を行ってきたが、2000年代に、政治的意義は高くとも文学的価値は低いとされてきた世紀転換期の作品群の見直しをする動きが生まれた。本研究は、そのような動きを踏まえながら、注目されてこなかった作家たちの活動に着目し、彼らの作品を分析することで、アフリカ系アメリカ文学史を読み直すことを目的とした。とくに意識したのは、政治活動に傾倒していた／文芸活動に専念していた、あるいは、白人中心のアメリカ文壇に認められることを求めている／黒人コミュニティ内の文化創造を願っていた、などの二項対立で語られてきた従来の研究方法から離れ、白人読者を意識しながら定評のある文芸雑誌へ原稿を寄せ、さらに黒人読者を意識しながら黒人誌に執筆をする、というように、この時代の作家・編集者・出版者が二方向へ、あるいは、さまざまに絡みあって創作活動を展開していたことを明らかにすることだった。また、この時代のアフリカ系アメリカ文学作品を、ジャンル選択や物語形式、出版方法など創作活動の観点から再考し、白人出版界との相互関係から、既存の文学史の記述に見られる二分法(黒人作家対白人作家、あるいは白人アメリカ文壇)に当てはまらない混在があることを明示しながら、文学史を見直す糸口として分析することを目指した。

## 3. 研究の方法

前述の目的を達成するため、一次資料を存分に利用する文化史的アプローチを試みた。具体的には、当時の文芸雑誌、大衆誌、黒人誌などの資料を収集して精読することから始めた。黒人コミュニティ内に縛られずに、アメリカ文壇・出版界・読者との関わりを読み解く試みであるため、原稿や書簡、日記などの資料を、図書館の未発表コレクションを利用して調査することも必要であった。地域や人種、ジェンダーを跨いでの研究は広範囲に及ぶため、編集者・出版社の分析をあくまでもアフリカ系アメリカ人作家との関係に絞って行った。アフリカ系アメリカ文学を、コミュニティ内の文化的ネットワークから探索する、あるいは、それぞれの作家とアメリカ文壇・読者とのつながりから探索するためには、出版や講演の記録、書簡の分析が有益だった。広く収集した資料の分析後は、テーマに沿って論考をまとめ(範囲が拡大し過ぎないように、それぞれの論考では対象とする作家を絞り込んだ)、国内外の学会で口頭発表を行った。そのうえで、学会誌など学術誌への論文投稿につなげた。

## 4. 研究成果

(1)「愛国心、男らしさ、米西戦争をめぐる黒人知識人の言説——サットン・E・グリッグスの描く国家／地域／自画像——」(『アメリカ研究』51号、21 - 43、2017年)

平成28年度に学会誌に掲載された論文では、南部研究の方法を踏まえながら、バプティスト教会の牧師であったサットン・E・グリッグスの小説群を、当時のアメリカの文化や言説に照らして分析し、世紀転換期の南部黒人指導者が、南部の言説を活用しつつ、独自の文化と意識を創生していたことを明らかにした。研究初年度であった平成28年度は研究の枠組みを構築することから始めた。年度前半に、南部の視点からアメリカ研究に新しい方向性を示したジョン・スミスによる2014年の研究書についての書評を学会誌に執筆したことから、4年に及ぶことになる研究の方法を確認することができた。すなわちアフリカ系アメリカ文学の範疇にとどまらず、広く文化的動向を探りつつ、人種や地域を越えた相互作用を解明していくことである。これはまた研究発表の場を広げることであった。

(2) 「James E. McGirt and Southern Boundaries: Dialects, Plantation Landscape and Restricted Uplift」( American Studies Association Annual Meeting, 2017年11月、於シカゴ)

サットン・E・グリッグスに注目した上記論文からつながるものとして、詩人でもあり雑誌編集者でもあったジェームズ・E・マッガートと南部の境界/限界についての研究報告を検討し、国際学会に応募したところ採択された。そこで、2017年秋の学会では、マッガートの作品や出版活動を、ここでも南部研究という文化史的な視点から読み解くことを試みた。南部という「排他的」かつ「閉鎖的」と語られてきた地域に拠点を置くアフリカ系アメリカ人作家の可動性(創作活動は複数の都市にまたがる)と多様性(創作媒体は小説から演劇、音楽に広がる)を明らかにした口頭発表は評価され、分析方法だけでなく、これまで取りあげられることの少なかった作家を見出すことの重要性を再認識した。学会でのコメントをもとに論文に発展させ学術誌に投稿をしている。ここでも、アフリカ系アメリカ文学分野にとらわれず、アメリカ研究に寄与することを念頭においた。

(3) 「The Journalistic Network and Literary Mobility of John E. Bruce, Pre-Harlem Renaissance Writer」( American Studies Association Annual Meeting, 2019年11月、於ホノルル)

ジェームズ・E・マッガート研究から引き続いて、同じように南部から北部に移住したジョン・E・ブルースを研究対象に据えた。応募した口頭発表が国際学会において採択されたため、方向性が間違っていないことを確認できた。また、ブルースについては、前年に異なるテーマではあるものの、歴史分野の国際学会に応募した際にも採択を受けていたことから(校務の都合で発表は辞退)注目に値する作家であることが分かる。口頭発表では、ブルースの可動性に注目して、所属していたさまざまな組織と、記事を寄せた新聞・雑誌などから、世紀転換期のアフリカ系アメリカ人作家の幅広い活動を明らかにした。アフリカ人探偵を扱った小説、ミンストレル・ショーの歌を組み込んだ演劇などを取りあげ、アフリカ系アメリカ人作家のあらたな側面を示した。ブルースに関しては、ニューヨーク公共図書館に膨大な書簡が所蔵されていることから、数回に渡る調査によって多くのことを見出すことができている。発表をもとに、そして多くの書簡の分析結果を含めた論文の執筆を進めている。

(4) 「ハーレム・ルネサンス前期——ジョン・エドワード・ブルースとヘンリエッタ・デイヴィスの映し出す世紀転換期アフリカ系アメリカ文化」(『ハーレム・ルネサンス——「ニュー・ニグロ」の文化史』第2章、2021年刊行予定)

ジョン・E・ブルースから、劇作の共著者であるヘンリエッタ・デイヴィスにも対象を広げ、ハーレム・ルネサンス期の前の時代を俯瞰した。アラン・ロックが編纂した『ニュー・ニグロ』で見せたのは、アフリカの彫刻・絵画あるいはアフリカ系アメリカ人の音楽が基盤となる新しい芸術様式であり、それはすでにあるものに倣うのではなく、まさに創り出すものだった。ヴィクトリア朝の文化と訣別し、モダニズムへと向かう決定的瞬間がハーレム・ルネサンスであるならば、ハーレム・ルネサンス前期の文化的様相は、奴隷制度の十九世紀から続く文化の継続と、既存のヨーロッパ芸術に依拠したアメリカ文化との混濁であった、と明らかにした。アフリカ系アメリカ人の文化的ネットワーク(黒人紙と文芸クラブや歴史協会などが果たした役割)について明示することによって、これまで研究してきた作家らを結びつけていくことができた。また、マッガート、ブルース、デイヴィスなど、国内では触れられることのなかった作家について論じることの意義は大きい。文化的に不毛とされてきた時代のアフリカ系アメリカ人の活動を、音楽や歴史、演劇まで多岐にわたるものとして明らかにすることができた。

(5) 「Managed Creativity: Alice Dunbar-Nelson's Navigation of the Publishing World's Racial and Gender Politics」( American Studies Association Annual Meeting, 2020年11月、於ボルティモア)

アリス・ダンバー=ネルソンの分析は、これまでの研究の延長線上にある。多くの作家も関わったさまざまな文芸クラブの活動を出発点に、アフリカ系アメリカ人コミュニティ内での活躍と、同時に試みられていたアメリカ文壇への働きかけに着目した。国際学会に応募した口頭発表が採択されたことから、このような研究の意義をあらためて確認することができた。本発表ではとくに、多くの著名なアメリカ作家のエージェント(著作権代理人)として知られたポール・レノルズと、アフリカ系アメリカ人女性詩人のダンバー=ネルソンの関係を明らかにすることによって、世紀転換期アメリカ文学の理解を深めることにもつながると考える。ダンバー=ネルソンについても、膨大な日記と書簡が所蔵されているため、そのような資料から解明できることは少なくない。アメリカ国内においても見直しが始まったばかりであり、この時代の作家について論じていくのは機宜を得た研究と言える。また、その意味では論考の発表を急ぐ必要があることも認識できた。2020年2月に、エレン・グラスゴウとマージョリー・キナン・ローリングスという女性作家二人の関係を描き出した研究書の書評をアメリカの学会誌 *Journal of Southern History* に寄せたが、そういった論評においても出版に関わるネットワークの重要性を示した。

以上述べてきたように、本研究はアフリカ系アメリカ文学史の再考を試みるもので、とくにこれまで注目されずにきた 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて出版された作品群を詳しく見ていくことによって、あらたな潮流を見いだすことを目指した。重要な役割を果たした作家を一人ひとり扱いながら、全体像を浮き彫りにしてきたが、それぞれの作家について探求を進めるうちに、当初の目的以上の結果を得ることができた。実際に図書館に足を運び、いまだデジタル化されていない資料を読むことができたためと考える。その成果を学術誌に投稿するだけでなく、ひとつの論考にまとめる作業を進めている。アフリカ系アメリカ人の結びつきからは、ハーレム・ルネサンスを生む土壌となった世紀転換期の文化——出版文化に限らず、文芸クラブなどの集会、音楽・演劇などの公演、国内外に広がる出版ネットワーク——を確認することができ、アフリカ系アメリカ文学のより明確な流れが見えてきた。現在これらをまとめたハーレム・ルネサンス前期についての研究書を企画検討している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 奥田暁代	4. 巻 51
2. 論文標題 愛国心、男らしさ、米西戦争をめぐる黒人知識人の言説 サットン・E・グリッグスの描く国家 / 地域 / 自画像	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『アメリカ研究』	6. 最初と最後の頁 21、43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Akiyo Ito Okuda
2. 発表標題 Managed Creativity: Alice Dunbar-Nelson 's Navigation of the Publishing World 's Racial and Gender Politics
3. 学会等名 American Studies Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Akiyo Ito Okuda
2. 発表標題 The Journalistic Network and Literary Mobility of John E. Bruce, Pre-Harlem Renaissance Writer
3. 学会等名 American Studies Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akiyo Ito Okuda
2. 発表標題 James E. McGirt and Southern Boundaries: Dialects, Plantation Landscape and Restricted Uplift
3. 学会等名 American Studies Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----